

研究テーマ：三原市の障害者を持つ父親の生活意識について 実態調査を通してー	
研究代表者（職氏名）：三原博光（県立広島大学、教授）	連絡先（E-mail等）： mihara@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者（職氏名）：宮垣秀正（三原市父ちゃんパワー会長）、森田邦三（三原市父ちゃんパワーの会役員）、須賀貞徳（三原市父ちゃんパワーの会役員）、松本耕二（広島経済大学、准教授）	

．はじめに

今回、障害者の父親が妻や障害の我が子に対して、どのような気持ちでかかわってきたのかを知る目的で、三原市の障害者を持つ父親の会や西宮市の知的障害者育成会、障害者福祉施設団体を通して、障害者の父親に対する生活意識についてのアンケート調査を実施した。その結果、342名の父親から回答を得ることができたので、報告することにした。

．方法

1. **調査対象**：調査は、三原市以外の（山口市、福山市、尾道市、西宮市など）の障害者の父親を対象に実施された。これらの組織が選ばれた理由は、筆者がこれらの会の活動に助言を与えたり、研究活動に協力して頂いていることなどから深いかかわりによるものであった。

2. **調査目的**：アンケート調査を通して、障害者の父親達の生活意識を明らかにし、障害者家族に対する福祉の支援の方向性を考える。

4. **調査方法**：質問紙によるアンケート調査を実施した。調査は、三原市の「障害者の父親の会」の会員や西宮市知的障害者育成会などの代表を通して、会員の父親に質問紙を配布した。調査期間は2007年8月から2008年10月までであった。

5. **調査内容**：主な調査項目は次の通りであった。(1)障害についての告知、(2)育児と家事の問題、(3)学校・社会的活動、(4)職場での状況、(5)障害児を持ったことに対して、(6)死後の問題、(7)社会に対する気持ち、(8)行政への期待

．調査結果

対象者の属性：342名の父親から回答を得た。年齢は、父親の7割強は50歳代以上であった。職業は、サラリーマンが最も多く、次いで年金生活者であった。妻の多くは働いていなかった。子どもの障害は知的障害が最も多く、重度が最も多かった。障害の子どもの年齢は、7割が19歳から49歳までの成人であった。

(1) 障害についての告知

子どもの障害について知ったときの気持ちについて：324名（96.7%）の9割が「ショックである」と回答していた。

子どもの障害について、両親の反応(父方)：「同情してくれた」218名(68.8%)、「分からない」63名(19.9%)、「文句を言った」24名(7.6%)であり、6割強は「同情してくれた」と回答した。

(2) 育児と家事の問題について

日頃、障害児の育児に参加しているか(参加したか)：「参加している」207名(62.6%)、「参加していない」124名(37.4%)であり、6割は、育児に参加していた。

日頃、家で妻の家事の手伝いをするか(手伝いをしたか)：「手伝いをする」173名(52.4%)、「手伝いをしない」157名(47.6%)であり、それぞれ回答は約半数ずつであった。

(3) 学校・社会的活動について

障害児の学校行事や施設行事などに参加するか(したのか):「参加する」224名(67.0%)、「参加しない」110名(33.0%)であり、6割は学校行事や施設行事に参加していた。

(4)職場での状況

子どもの障害について知った後、落ち着いて仕事ができただか:「あまり落ち着いてできなかった」111名(33.9%)、「手につかなかった」36名(11.0%)、「普通に落ち着いてできた」168名(51.4%)であり、半数は、「普通に落ち着いて仕事できた」と回答をしていた。

(5)障害児を持ったことに対して

障害児を持たれてよいことがあったか:「あった」218名(67.1%)、「なかった」107名(32.9%)、6割強が「あった」と回答していた。

障害児を持って辛かったことがあったか:「あった」280名(87.6%)、「なかった」40名(12.5%)で、8割強は辛いことがあったと回答し、障害者家族の辛さが示された。

(6)死後の問題

死後、心配すること:「障害者の世話」223名(69.8%)、「妻のこと」44名(13.2%)、「家族の経済的問題」38名(11.4%)で、7割が死後、わが子の「障害者の世話」を心配していた。

(7)社会に対する気持ち

社会は障害者に対して冷たいと思うか:「思う」234名(74.5%)、「思わない」80名(25.5%)で、7割は、社会が障害者に対して「冷たい」と感じていた。

社会に対して援助などを期待している:「思う」226名(72.7%)、「思わない」85名(27.3%)で、7割は、社会に対して援助などを期待していた。

(8)行政への期待

障害者の働く場所の確保:「期待する」が275名(90.5%)で、9割は、障害者の働く場所の確保を期待していた。

親亡き後の障害者施設の充実(表6)

「期待をする」が317名(97.8%)、ほぼ全員が親亡き後の障害者施設の充実を期待していた。

考察

大部分の障害者の父親は、子どもの障害についての診断を受けたとき、強いショックを受けたにもかかわらず、そのうちの5割が落ち着いて仕事ができたと回答していた。これらの父親は落ち着いて仕事ができたとしても、心の中はそのショックの気持を抑えて、仕事をしていたのではないかと考えられる。父親は、子どもが障害の診断を告知されながらも、6割は育児と学校行事に対して協力的であった。しかし、半数が家事には協力的ではなかった。これは、多くの父親が仕事に追われ、妻の家事などを手伝う余裕がなかった結果によるものなのか、あるいは父親の家事そのものが苦手であったのではないかと考えられる。9割の父親が、親亡き後の障害者施設の充実を期待していた。父親は、自分の死後、きょうだい達による障害者の世話ではなく、施設にその期待をしていると思われる。

文献

町田おやじの会(2004):「障害児なんだうちの子」って言えたおやじたち。ぶどう社。

中根成寿(2004):障害者家族の父親とは誰か。障害学会第1回大会。